『間違いの喜劇』における家庭生活

大阪芸術大学　文芸学科　教授　団野　恵美子

16 世紀から 17 世紀にかけて、約 150 年もの間、イギリスでは女性向けの日常生活の手引書、女性の地位に関する論説や説教集、礼儀作法書が出版されてきた。父権制社会における女性の立場や結婚について、家庭生活手引書などの影響があることは、エリザベス朝演劇の端々に明白である。

シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）の『間違いの喜劇』（*The Comedy of Errors,* 1594）は、プラウトゥスの古典喜劇『メナエクムス兄弟』の枠組みを取り入れながら、双子の取り違えという伝統的な笑いに、リアルな人間像と心理的描写を与えた喜劇である。

エフェソスで逮捕された商人イジーオンが処刑される夕方 5 時までに、二組の双子が街角でも妻からも取り違えられ、登場人物はいつも金の行方を気にしている。エイドリアーナは昼食に帰宅しない夫に嫉妬し、強制的に連れ帰るのは夫の双子の片割れである。召使いの双子ドローミオが加わることで、人違いが重層的になり、そこに日用品の首飾り、金、指輪などが取り違えの現物として手に渡る。この芝居の台詞に当時の社会事情が反映されていることに注目し、人情喜劇に当時の家庭生活が必須である意味を考える。

1.　劇の概要と特徴

エフェソスとシラクサは敵対する二都市で通商が途絶えている。もし互いの町に姿を見せた者は、財産没収で死刑となるが、千マルクの大金があれば保釈される、という状況から始まる。

シラクサの商人イジーオンが逮捕され、エフェソスに来た理由が船の難破で生き別れた妻と双子の兄弟、召使いとなる兄弟を探しだすことが発端だったことが明らかになる。妻にはアンティフォラス兄とドローミオ兄、夫にはアンティフォラス弟とドローミオ弟が残された。その二組の双子兄弟がエフェソスで互いの存在を知らずに遭遇し、宿屋や港、自宅や娼婦の家を行き来する中で混乱を招く。

エフェソスで妻と暮らすアンティフォラス兄は、金細工師に首飾りを作らせ、その代金と首飾りを交換する相手と場所を取り違える。シラクサ出身のアンティフォラス弟は、商売をしようと金を持参しているが、商談をまとめようと町の見学をしているうちに、兄の人間関係に巻き込まれていく。

アンティフォラス兄は妻から妬まれ、首飾りの代金を騙したと監獄に入れられそうになり、アンティフォラス弟は魔女の町だと怯え逃げようとする。混沌とした状況を調和へ導くのは、イジーオンの処刑直前、双子が出会い、逃亡先の尼僧院から登場する尼僧院長の母親であった。

人情喜劇となる背景には、海外貿易が盛んな都市の政治と人々の暮らし、家庭における女性の地位が描かれている。

2.　商人と複式簿記

複式簿記はヴェネツィアやフィレンツェなどイタリア北方の都市国家で、商人たちの日々の取引を記録する技法として誕生した。帳簿に大切な財産であるお金や宝石などを記録する行為が、重要な機能の一つである。16 世紀末から 17 世紀にかけて造船技術に優れ、香辛料貿易で莫大な利益を得たオランダが、中世簿記を近代簿記へと進化させていった。一年ごとに利益を計算し、正確な決算のために運算を行う必要があったからである。織物商ヤン・インピン・クリストッフェル（1485-1540）の簿記書『新しい手引き』（1543）は、英語に翻訳されイギリスでも広く読まれた。

イジーオンも外国に代理人を置いて帳簿を任せていたが、その会計担当が死亡したことで商品が放置されることを危惧してシラクサを出ている。ある商人は旅費が必要となり、金細工師に貸した金を回収しようとし、金細工師はアンティフォラスの首飾りの支払いがそれと同額だと言う。一つの商談に、貸した金、借りた金という双方の立場と、首飾りや指輪という資産計算が、この騒動に使われている。

3.　家庭生活と女性の権利

16 世紀に学校教育が重要視されたのは、テューダー朝の君主が、スパイとの連絡、洗礼や結婚、埋葬の記録係としても、読み書きのできる役人を必要としたからである。また、印刷技術で英語書籍が手に入りやすく、トマス・ドーソン『良き主婦の宝石』（1596）など料理のレシピ、医術や掃除法の手引書が広く読まれた。

「トルコのつづれ織りのかかった机の中に財布がある」との台詞から、日用品で生活の豊かさを示し、夫に嫉妬する妻を諌めて「料理に非難のソースをかけると、心乱れて消化不良になる」と比喩も家庭生活の延長線上に位置を占めている。

エイドリアーナが「どうして男の人たちの自由の方が私たちのより大きくなくちゃいけないのか」と愚痴ると、ルシアーナは「女性の主人であり、君主となるものなのよ。だからご自分の意志を男の意志に沿わせなければ」と家父長制度にかしずくように見えるが、「効果のある治療」で狂人扱いの息子を助け、謎を解き死罪の夫の「縄を解く」と調和に導くのは女性の尼僧院長である。

女性も、家庭内、家庭外両方で男性の暴政を表明できるほど解放されてきたことが明確であり、召使いの双子の最後の台詞「この世の中に二人一緒に生まれてきたんだ、だから手に手を取って、どっちが先ってことなくいこうや」から、夫と妻の新しい調和の象徴だと読むことができる。